“難民若年層による生活世界の形成—インドおよびネパール在住チベット難民を事例に”

准教授　山本　達也（文化人類学）

1979年12月生まれ、2009年３月京都大学大学院博士課程修了、2011年４月日本学術振興会特別研究員（PD）、2013年７月人間文化研究機構地域研究推進センター研究員／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、2015年４月静岡大学准教授
2019年より第４期若手重点研究者

研究概要

戦争の世紀であった20世紀は、難民創出の世紀でもありました。故郷を追われた1959年以降、亡命先で暮らしてきたチベット難民ですが、難民2世以降の人々はチベットの風土や環境を直接知りません。若者がどのようにホスト国で生活世界を作り上げてきたのか、という問題関心のもと、以下の二点を重点的に研究しています。

① 国籍をめぐる交渉

難民としての地位を堅持するか、インドおよびネパール国籍を取得するかは、難民社会形成後60年が経過した現在、チベット難民にとって喫緊の課題となっています。国籍をめぐる若者たちの意思決定を難民社会およびホスト国社会経済的要因と絡めて分析しています。

②難民によるポピュラー音楽の生産・流通・消費

難民が作り、消費するポピュラー音楽は、彼らの現状理解や願望など、様々な想像力がぶつかり合う媒体です。音楽に対する嗜好の変遷、正当化の論理などを生産・流通・消費の観点から追うことで、若者たちの描く難民社会の過去・現在・未来の抽出を目指しています。

チベット難民若年層とともに

チベット難民のポピュラー音楽CDを売るネパールのCD屋

メッセージ

難民の暮らしは、ともすれば日本に暮らす私たちからすれば縁遠いものと見えるかもしれません。確かに、経済的な状況、法的な地位などの点からすれば、私たちの想像以上の環境に彼らは暮らしていると言えます。しかしながら、日本で暮らす私たちが多様であるように、難民である彼らも多様な存在であり、また、彼らなりに自分たちの暮らしを作り上げていっています。特に若者にとっては、一見軽薄なものに見えるポピュラー文化などが、彼らの生活世界の構築のための重要な媒体となっています。

私が専門とする文化人類学は、自分と縁遠い他者との差異を肯定し、自分たちが別のあり方で生きうることを考え、提示する学問です。静岡大学での研究を通じ、皆さんにとっての難民像や他者をめぐる考え方に揺さぶりをかけ、今とは別の生き方をともに模索してくことができれば、と考えています。

【主な研究業績】

受賞歴：
第３回地域研究コンソーシアム賞登竜賞（2013年）

外部資金獲得状況：
科学研究費補助金基盤研究B「現代南アジアにおける法と権利の動態をめぐる研究—国制・権利・法秩序」（研究代表者、2014年～2017年）、科学研究費補助金基盤研究B「音の継承プロセスと非認知能力の拡張に関する人類学的研究：音、身体、情動」（研究分担者、2018年～2021年）、科学研究費補助金基盤研究B「インドにおける新しいメディア状況と芸能のグローバル化：文化の環流の人類学的研究」（研究分担者、2014年～2017年）、科学研究費補助金基盤研究C「ヒマラヤ地域における所有—社会的制御能の系譜学的研究」（研究分担者、2018年～2021年）など

著書・論文：
１）T. Yamamoto and T. Ueda (eds.), *Law and Democracy in Contemporary India: Constitution, Contact Zone, and Performing Rights*. Palgrave Macmillan. 2019.
２）T. Yamamoto, Lyrics Matter : Reconsidering Agency in the Discourses and Practices of Tibetan Pop Music among Tibetan Refugees *Revue d'Etudes Tibétaines* (vol)40/ 126-152, 2017.
３）『舞台の上の難民—チベット難民芸能集団の民族誌』法蔵館、2013年。

若手重点研究者